特219
107

和八年二月

時局教育資料

第一輯

岩手縣教育會編

始

時局教育資料　第一輯

目次

序
凡例
第一章　國民の聲援
一、第八師團滿洲出動に際し……一
二、將兵一同勇躍壯途に向ひ候……七
三、鄉國岩手の誇……八

四、熱河の風雲急と聞き……八
五、滿洲事變一週年を迎へて……一一
六、百萬縣民に代り感謝と慰問の衷情を陳ぶ……一五
七、歳末に當り滿洲派遣軍へ……一七
八、將兵一同に代りて……一八
九、縣民各位に宜しく……二〇
一〇、交替派遣の下士官を送る……二二
一一、凱旋の五勇士……二三
一二、酷寒將に至らんとす自重加餐せられよ……二五
一三、一心不亂皇軍の威武發揚に努力致居候……二七

第二章 戰地消息

一四、實彈演習だ、と敵を呑む我郷土兵……二九
一五、好機到來を待望する我郷土兵……三二
一六、野砲兵大隊の殊勳……三六
一七、戰傷の兄、弟の悲觀を戒しむ……四〇
一八、軍艦八雲乘組縣人より……四三
一九、在錦州部隊は豫想以上の活躍に候……四五
二〇、祖國に報ずる覺悟を堅め居り候……四六
二一、一先づ義州に落付き申候……四八
二二、盛岡工兵隊渡滿（第一報）……五〇

二三、戰終はれる上海から……五三
二四、盛岡工兵隊の轉戰（第二報）……五六
二五、私は盛岡生れの者必ずや御期待に副はん……五八
二六、興城から……五九
二七、盛岡工兵隊（第三報）……六一
二八、ラヂオセットの御寄贈感謝惜く能はず候……六三
二九、我々は何人も信頼せぬ、唯第二國民の兒童を信頼するのみ……六五
三〇、軍艦北上の縣人兵より……七四
三一、他縣兵の羨望となり居候……七六
三二、御高恩の萬一に報ん覺悟に候……七八

第三章　銃後の援護

三三、家族へ迄の御援護は全く豫想せざる所に候……八一
三四、銃後の御援護唯々感泣あるのみ……八二
三五、戰傷者見舞……八四
三六、御蔭にて年を取り申候……八五
三七、家族に對し國家的特典なきに特に御便宜を賜り感激無量に候……八七
三八、家族への慰籍、本當に勿体なき所……九一
三九、劍は淺し、幸に御安慮被下度……九三
四〇、軍事救護及出動兵並家族慰問概要……九五

序

昭和六年九月十八日、滿鐵線の爆破に端を發した謂所滿蒙事變は我帝國の生命線を著しくおびやかした國運を堵して之が確保を爲さねばならぬ第三者の介人を絶体に排撃して東洋永遠の平和を樹立せなばならぬ等々の國論高調し全世界の啓蒙運動こなり、一對十三の外交戰こなり、その輿論にその行動に、空前の緊張を示した。本縣も亦擧縣官民一致之に當り後援、激勵、武裝移民並びに銃後の援護等に全力を傾けつゝある、しかも事件は早急に解決の豫想つかず、持久的方策を採らねばならぬ情勢にある、此の時に際會し、係累の近き本

縣關係の時局資料を輯錄して以つて、學校——社會——家庭教育の教材となすは、最も緊急で、最も有意義なるを認め、急遽之が編纂發行を試みる事とした、希くは漫然たる瞥見に終始せず、意のある所を諒察して、教育的利用の工夫に幾段の考慮を拂はれんことを望む。

昭和八年三月

岩手縣教育會長　石黑英彦

凡例

一、本資料は、時局に關し教育的意義あるものにして而も岩手縣關係のもののみを輯めたり。

二、本資料は逐次完成を期し、第一輯は主として縣廳關係文書より選敍したり、第二輯以下縣內各地に亘り官公署團体の往復文書並びに私信にも及び、以つて縣人の對時局の行動——意氣——感情の發露を網羅せんとす。

三、編纂上、國民の聲援、戰地消息、銃後の援護の三部に大別し、各部內は年月の順に配列せり。

四、各編の題名は、內容の中心を示さん爲め、適宜編者に於て命題せるものなり

五、各編の文章は、殆ど原文のまゝとし、重復・假名違ひ・誤字等を訂正するに

止めたり、又軍機の祕密、個人の自尊心を傷ける如き点は深く考慮を拂ひ、
適宜改削を加へたり。

國民の聲援

一、第〇師團滿洲出動に際し（昭和七年）

一、四月六日發信電報

國家重大の時機に當り貴師團滿蒙の野に御出動の趣感激に禁へず、閣下及閣下の率ゐらるゝ吾東北健兒の武運長久を祈り切に皇國の爲め一意勇往邁進せられんことを希ふ、銃後の任務は吾等心魂に銘し居れり、意を安んせられんことを乞ふ

東京にて石黑岩手縣知事

西〇團長宛

皇國の爲御健鬪あそばされ彌榮を祈り上ぐ、東京にて石黑岩手縣知事

歩兵第〇〇〇聯隊長宛

同　　參謀長宛

石　坂　少　將　宛

秋田第〇〇旅團長宛

御國の一大事に當り滿蒙の野に御出動なされ國家の第一線に立ちて國民の本分を完ふせられ候事武士の面目家門の榮譽は勿論鄕國岩手の名譽なり、吾等鄕閭の者は感謝感激にたへ申さず、ひたすら銃後のつとめいたすべきにつき、切に御健康に留意せられ心おきなく御國のため御奉公なされ、岩手縣兒の名を擧げられ候やう神かけて祈り上ぐ、　東京にて石黒岩手縣知事

歩兵第〇〇〇聯隊

騎　兵　第　〇　聯　隊
野砲兵　第　〇　聯　隊
輜重兵　第　〇　大　隊
岩手縣出身將兵各位宛

二、　四月七日着電

御祝詞を感謝す、將來宜敷御後援を庶幾ふ、第〇〇團長

（石黒知事宛）

貴電を謝す、小官は殘留するに付愈々御懇情を請ふ　石坂（少將）

（石黒知事宛）

出動に當り祝詞と激勵の電文を賜り感謝す、我等一同誓つて御期待に對ふ覺悟

なり、　輜○（石黒知事宛）

三、出發に臨み（四月十四日着電）

出發に當り熱烈なる歡送を謝す、一路平安にして我が將兵の士氣極めて旺盛なり、縣民各位へ傳達を乞ふ

西○團長（石黒岩手縣知事宛）

午前八時佐渡沖、天氣晴朗、一同士氣旺盛、御聲援を謝す、小泉中隊長（石黒岩手縣知事宛）

四、四月十九日發電

いよ／＼一線に立たるゝ貴官並に將兵各位に對し深甚なる謝意を表す、本縣は出征將士家族の慰問に最善の努力をなし後顧の憂斷して無きを期しつゝあり、切に御健康に留意せられ、心おきなく御奮闘、我國權益擁護の大任を完ふせらんれことを望む、岩手縣知事

滿洲派遣西○團長
同　步兵第○○聯隊長
同　步兵第○聯隊長
同　工兵第○大隊中隊長
同　野砲第○聯隊長
同　輜重兵監視隊長
宛

五、四月十八日着電

海上恙なく一同士氣旺盛にて上陸を終るに當り、從來の御厚意を謝すると共に將來相變らずの御後援を請ふ、縣民各位に宜しく、　西〇團長　（石黑知事宛）

一同無事上陸す歩兵第〇〇〇聯隊長　（同前）

海上頗る平穩、深甚なる御歡送を謝す、野砲兵第〇聯隊長　（同前）

御厚意により海路平安、大陸に第一歩を踏む、士氣旺盛、派遣工兵中隊長　（同前）

無事上陸、縣下將兵に代り御厚意を謝す、阿部工兵中尉　（同前）

二、將兵一同勇躍壯途に向ひ候

謹啓　今回當師團主力の滿洲派遣に際しては、熱誠なる各位の御後援により出征將兵一同感激全く後顧の憂を除き志氣愈々旺盛勇躍して壯途に相向ひ候事、偏に各位の御高配に依ることゝ存じ茲に深甚の謝意を表し候、尚向後引續き銃後の御後援に關し何分の御配慮相煩し度願上候　敬具

昭和七年四月十九日

第〇〇團留守司令官　原田敬一

石黑英彥閣下

三、郷國岩手の誇　（昭和七年六月二日發信）

初陣に大勝を博せられたる趣、郷國岩手の誇、何ものか之に過ぎん、邦家の爲彌々御奮闘を祈る　岩手縣知事

（滿洲派遣歩兵第〇〇〇聯隊長安川大佐宛）

註　義州附近の戰に、敵の死体五〇、我の輕傷者二名といふ戰况を聞き祝電を發せるに、六月三日安川聯隊長より「御祝電を謝す」の返電ありたり

四、熱河の風雲急と聞く（昭和七年七月廿一日發電）

〇西〇團長　宛

熱河の形勢重大化し其任務愈々重きを加ふるに當り閣下並に閣下の統率せらるゝ將兵各位に對し深甚の謝意を表す、我等は只管銃後の任務に遺憾なきを期すべし御心置なく皇國の爲め御奮闘なされんことを希ふ、

岩手縣知事

〇歩兵第〇〇〇聯隊長・同第〇聯隊長・工兵第〇大隊中隊長・野砲兵第〇聯隊長及び輜重兵監視隊長宛

熱河の形勢重大化し其任務愈々重きを加ふるに當り皇國の爲め一意勇往邁進せられんことを希ふ、我等は銃後の任務に遺憾なきを期すべし、意を安んぜられんことを乞ふ、　岩手縣知事

〇西〇團長より

御厚意を謝す、時局に善處し誓つて御期待に副はん事を期す、
岩手縣知事宛 （七月廿二日着信）

○輸送監視隊長より

激勵の電報を謝す、我等全力を擧げて任務の達成に努めん、御安心を乞ふ、
岩手縣知事宛 （七月廿二日着）

○小泉中隊長より （七月廿二日着）

貴電に對し深甚の謝意を表す、我等一同益々士氣旺盛以て御期待に背かざらんことを期す、 岩手縣知事宛

○歩兵第○○聯隊長より

御激勵の電感謝す、我等益々一致團結、皇軍の威武を發揚に努め、誓つて御期待に副はん事を期す、 岩手縣知事宛 （七月廿三日着）

○歩兵第○聯隊長より

力強き御懇電を深謝す、我等の舞臺展開するの時一死以て皇國に報ゆるあるのみ、 岩手縣知事宛（七月廿三日着）

五、滿洲事變一週年を迎へて

○西○團長閣下へ （昭和七年九月十七日發電）

貴師團の勇躍渡滿せられてより茲に半歲、いまや滿洲新國家承認せられ、引續き滿洲事變勃發一週年記念日を迎ふるに當り、縣民一同特に感激の新なるものあ

り、此の歷史的期日を愈々將來に光輝あらしめんがため、閣下及閣下の統率せらるゝ吾東北健兒の武運長久を祈り、切に皇國のため一意邁進せられんことを希ふ　石黑岩手縣知事

○步兵第○旅團長同第○○○聯隊長同第○聯隊長工兵第○大隊中隊長野砲兵第○聯隊長輸送監視隊長宛同文　（發信同前）

いまや滿洲新國家承認せられ、引續き事變勃發一週年記念日を迎ふるに當り、縣民一同を代表し、貴官並將兵各位の武運長久を祈り、皇國のため一意邁進せられんことを希ふ　石黑岩手縣知事

◉

祝電を深く感謝す、益々奮勵御期待に副はんとす、御後援を乞ふ　步○○○長　（九月廿一日着電）

⊙

謹みて貴電を拜し感謝に堪へず、將兵一同皇國の爲め死力を盡し奮闘せん、市民各位の御聲援を謝し併せて將來の御聲援を祈る　步○聯隊長　（九月廿日着電）

⊙

一週年記念日に當り激勵の電報を拜領し、將兵一同の士氣益々揚る、今後一層大任の達成に邁進し、各位の御期待に副はんことを期す　小泉大尉　（同　前）

⊙

遼省の地に於て、事變一週年を迎へ感無量、縣民各位の熱誠を深謝し、益々奮闘重責を果さんことを期す、　野砲○聯長　（同　前）

⊙

謹啓　滿洲事變突發、鈴木○團出動、次て○團主力の渡滿後は何與御後援を戴

き、殊に今回は事變一週年記念日に方り、熱誠溢るる御祝電に接し誠に難有、陣中將兵の慰安と士氣の向上に裨益する處甚大なるを覺へ申候、閣下將兵一同以御蔭士氣愈々旺盛、時局に善處して皇軍就中第〇師團の名譽を發揮せんことを肝銘致居候間、不相變御後援被下度御願申上候　先は不取敢以書面御禮申上度如斯に御座候

尙貴縣民各位に宜敷御傳言被下度御願申上候　敬具

九月十八日　滿洲派遣

第〇師團長　西　義　一

岩手縣知事　石黑英彥閣下　（九月三十日着信）

六、百萬縣民に代り感謝と慰問の衷情を陳ぶ

顧れば昨年九月柳條溝事變の勃發以來一年有餘、世界戰史上未曾有の寡兵を以て衆を制し、戰禍漸く收まり滿洲國の創業を援け其基礎漸く成れり、然と雖も匪賊草兵の潛行橫暴は一日の苟安を許さゞるの狀勢にありと聞く。

惟ふに東洋平和確保の爲めとはいへ、他國の治安維持の責務の重と犧牲の大とを敢受する如きは、世界史上前古未だ曾て有らざる人類愛の最高最美の發露たりこの光輝ある百年の大計に參加せる東北兵團の誇りは、獨り貴隊の名譽たるに止まらず、我縣民の喜悅に堪へざる所、希くは益々自重せられ、愈々健闘以て有終の美果を收められんことを

時將に滿蒙特有の酷寒に入らんとす、各位倍々細心の用意を悉くし萬善の方途を講せられ、凍傷立つ能はざるが如き無念のなきを切望す、我等百萬縣民は老となく幼となく、日夜思ひを滿蒙の天に運び、只管神佛の加護を祈り各位の健闘を待望して止まず、諸勇士銃後の憂の如きは、鄕邑益々協力を加へ、官民愈々戮力して息災安泰の確保を期しつゝあり、希くは各位幸に意を强うせられんことを、

本縣會の開會の壁頭に當り、特に決議を以て玆に感謝の微衷を披攊し、併せて慰問の誠意を陳ぶ

昭和七年十一月二十五日

岩手縣會議長　佐々木安五郎

滿洲派遣軍第〇〇團長　閣下

尙　步兵第〇〇〇聯隊長・野砲第〇聯隊長・工兵第〇大隊長・輜重看視隊長・獨立守備隊步兵第〇大隊長・同第〇大隊長宛同文發送

七、歲末に當り滿洲派遣軍へ

極寒凜烈の滿洲の野にありて居留同胞の生命財產保護の重大任務に服しつゝ日夜身命を賭して御健鬪せらるゝ將兵各位の御辛勞誠に感激の至りに不堪候、就ては聊か慰問の微意を可表豫て岩手日報社・岩手每日新聞社と共同發起の下に縣民一般より募集したる金員中今回左記の通り歲末酒肴料として及送附候條、各部隊本縣出身將兵に對し可然御分與方御取計相成度、尙出動將兵家族の慰問保護に

對しては、夫々適當なる方法を講じ居候へば後顧の憂なく充分御奮闘せらるる樣御傳達相成度

記

一金八百圓也　第○團各部隊本縣出身兵

一金貳百圓也　滿洲獨立守備隊本縣出身兵

（註）右は石黒知事より昭和七年十二月十三日附にて送られた。

八、將兵一同に代りて

其一

歳末酒肴料有難く頂戴す、早速貴縣出身將兵に分配せんと取敢す一同に代り御禮申上ぐ、縣民各位に宜しく。○團長　（昭和七年十二月十九日附）

岩手縣知事殿

其二

謹啓屢次御懇篤なる御慰問に接し、今又縣下出身兵に對して縣民各位の心よりなる慰問金子を賜はり、誠に有難く厚く御禮申上候

嚴寒漸く迫り申候へ共、將兵一同志氣益々旺盛日夜崇高なる義務を果すべく必死の活動を持續致居候間御安慮被下度候

玆に取敢へず一同を代表し御禮申述度如斯御座候、縣民各位並本事業關係者に對しては然るべく御風聲の程願上候　敬具

昭和七年十二月十八日

獨立〇〇隊司令官

陸軍中將　井上忠也

岩手縣知事　閣下

九、縣民各位に宜しく

謹啓

時下向寒の砌愈々御健勝之趣奉慶賀候

陳者先般は當部隊貴縣出身將兵に對し歳末酒肴料として知事閣下・岩手日報社及岩手毎日新聞社發起にかかる貴縣民一般よりの募集金を配分せられ候御厚意御芳情の段感激に不堪所に候、左記の名に對し夫々分配致候間玆に謹みて御禮申上度如斯御座候

尚縣民各位によろしく御傳言願上候　敬具

昭和七年十二月二十日

歩兵第〇〇聯長　鈴木美通

岩手縣知事石黒英彦閣下

左記

岩手縣二戸郡御返地村出身　歩兵曹長　福勢英三

仝　氣仙郡矢作村出身　歩兵曹長　村上六郎

一〇、交替派遣の下士官を送る

○無線電信にてバイカル丸氣付

御一同の御勇健と御平安とを祈る、祖國守護の大任に勇往邁進せられんことを

石黒岩手縣知事

（昭和七年十二月十九日發信）

○安　着　電　報

一同無事大連着いた、士氣旺盛、遙に謝意を表す、高橋與助（十二月二十日受信）

「註」第○團の補充として、歩○○、砲○、騎○隊からそれ〴〵下士官の交替派遣があつた、時は昭和七年十二月十五日、歩兵特務曹長高橋與助氏引卒の下に勇躍征途に着いたのである

一一、凱旋の五勇士

拜啓　時下益々御清祥の段奉慶賀候、陳者貴隊佐藤特務曹長殿外四氏に於かれては、昨秋滿洲事變の爲出動、饒陽河、チチハル、冠牟溝其他各地にて、敵匪と戰ひ屢次偉勳を樹てられ我が生命線たる滿蒙治安保護の重任を完ふし、今般目出度凱旋被爲候事は、洵に武人の本懷之に過ぐるもの無之、又貴隊の鑑として縣民の齊しく名譽とする所に有之欣快の至りに不堪候、就いては早速參隊祝意を表す

べきの處、歳末諸事輻輪の爲不取敢以書中各位の御勞苦を謝し、謹みて祝意を表し度如斯御座候　敬具

昭和七年十二月二十二日

岩手縣知事　石黒英彦

弘前歩兵〇〇〇聯隊留守隊長

陸軍歩兵中佐　大野清殿

「註」此時の凱旋兵は第八師團管下にて准士官・下士官四十七名・内本縣人は特務曹長佐藤行一曹長宮川次郎、同吉田熊太郎、同平野寛軍曹山下悌三の五十であつた。

一二、酷寒將に至らんとす自重加餐せられる

謹啓　益々御健勝の段奉慶賀候、陳者、御渡滿以來櫛風沐雨つぶさに辛酸を甞められ、克く皇軍の第一線に起ちて、暴戻なる敵匪を掃蕩し、滿洲建國の偉業を援け、極東永遠の平和の基礎を確立し、皇軍の威武を中外に宣揚せられたる劃期的御功績は、縣民の齊しく感謝讃仰する所に有之、洵に鄕黨の誇之に過ぐるもの無之候、時や再び酷寒相襲ひ、朔風吹き荒ぶ銀雪の曠野に奮戰せらるゝ御勞苦を偲び、我等は日夜思ひを各位の上に運び、只管神明の加護を祈居候。

黐つて本縣の近狀を申上ぐれば、豊作豊漁と共に炭價を始め諸物價昇騰し、その影響は延いて市街地にも及び、加ふるに時局匡救施設は各方面共大いに進捗し、

更生の氣運漲り、縣民の生活亦活氣を呈し來り候は洵に同慶の至りに有之候、尙豫て「銃後のニユウス」に依り御報導申上候六原青年道場の修練を終へたる鄕黨の清新なる後進は、更生岩手建設の戰士として、各位に劣らざる覺悟を以て、捨身の奮鬪を續け居り候、更に銃後の後援に至りては、官民誓つて遺憾なきを期し居り候間、希くは意を安んぜられ、倍々加餐自愛、愈々御健鬪被遊以て祖國守護の名譽ある重任遂行に、勇往邁進せらるゝ樣偏に祈上候　敬具

昭和七年十二月二十二日

岩手縣知事　石黑英彥

滿洲派遣軍西○團長閣下

並に步兵第○○○聯隊長・同第○聯隊長・工兵第○大隊第一中隊長・野砲兵第○聯隊長・輜重兵監視隊長・獨立守備隊步兵第○大隊長・同第○大隊長宛　（同文）

一三、一心不亂皇軍の威武發揚に努力致居候

復啓

嚴寒之砌益々御機嫌能被遊候段奉賀候、脚設閣下始め縣民各位には寒暑晝夜の異變さては日常の事迄御配慮を辱ふし御後援之段感謝の外無之將兵一同御蔭を以つて異鄕に在るも嬉々として一心不亂皇軍の威武發揚に努力罷在着々其効果を現し居候條何卒御安心下され度尙此度は赤誠の酒肴料澤山御惠送下され御慰問に預り

たる段一同衷心より感謝する處小官茲に一同を代表し厚く御禮申上候何卒宜しく縣下一般へ御風聲御願申上候、

滿洲は寒氣嚴しきとは乍申當地の如きは鄕土と多少の差ある位にて御座候へば何卒御放念被下度尙今後共宜敷御願申上候

尙貴縣下擧げて更生に御精進あらせらるゝ樣一同期待申上候

先は常々の御後援並に御慰問に對し深甚の謝意を表度如斯御座候　敬具

昭和七年十二月三十日

滿洲派遣軍步兵第〇〇〇聯隊

聯隊長　早川　止

岩手縣知事　石黑英彥　閣下

戰地消息

一四、實彈演習だと敵を呑む我が郷土兵

拜啓　吏員御一同樣には昭和の第七の新春を迎ひ益々御壯健にて御執務の事と遙滿蒙――氷原陣地より遠察致します、ひま行く駒の足はやく、一月もはや數日を余すのみとなり、小生等渡滿三ヶ月にならんとして居ります、その間名譽ある皇軍として面目を保ちつゝ所々にてその重任を果し、就中舊臘十二月廿五日よりは、關東軍電信隊に編入され、第○團配屬となつて、錦州攻擊に參加しました、其後は南滿一帶に亘りての匪賊討伐に出動しました、そして悉く賊類を掃蕩したのです、誰かゞ言つたやうに、「日本軍の滿蒙に於ける實彈演習」と、むべ

なるかな、日章旗を飜し我皇軍の行く所、大和魂の彈こめてズドンと一發、ブッパナスと、チャンコロめが、皆先を爭つて取る物も取らず逃走して了うのです恰も無人の境を行く如しです、勿論中には頑强に抵抗する者もありますけれど…

一月廿九日無事遼陽に歸り、翌日命により滿鐵の北端長春に參りました、之は逐次ハルビンに出動の目的だつたのですが、その夕刻突然小生等無線電信部隊のみは、直ちに四平街經由の汽車で、チチハルに向ふべき命を受け夜九時出發、二晝夜車中に起臥、二月二日朝チチハルに到着しました、再び混成旅團通信隊に復歸したのです、この旅團の主力部隊は全部チチハルに集中――目下同地及び附近の警備に任じて居ります。

流石は北滿、嚴しい寒さは實に骨まで凍ると言ひたい程です、南滿遼陽地方の小春日和は今は夢です、而し斯樣な酷寒も身命を賭して御國の爲最後まで活躍す

るといふ確たる決心の炎火により些かの苦もなく征服出來るので、少しも難儀を感じません

右拙筆亂文ながら一寸御報まで

二月七日　（昭和七年）

滿洲混成第○旅團通信隊無線小隊　赤坂　重夫

西磐井郡金澤村役場　御中

一五、好機到來を待望する我郷土兵

拜啓　時下寒冷の候村長殿始め御一同樣には益々御清祥の段奉賀候、陳者この度は御公務御多忙中にも拘はらず、不肖の爲種々御配慮を賜り御厚情御後援の段感激に不堪厚く御禮申上候、然るに御厚誼も顧みず御無沙汰に打過ぎ今更御詫の申樣も無之誠に汗顏の至りに候、何卒平に御海容被下度偏に願上候

さて小生出征以來御蔭樣にて至極元氣にて働き居り候へば何卒御安心下され度皆樣の熱烈なる御後援を思ふ時、軍籍に名を連ねたる吾身の名譽、責務の重大さを今更の如く感得仕り、元より玉碎せんこそ男子の本懷と深く感銘致し居る次第に御座候、然るに武運拙くしていまだ戰鬪らしきものに參加致さず、去る十二月二十七日最初の錦州攻擊を爲すべく、饒陽河附近に於て僅かの戰鬪ありたるに過ぎず、聯盟會議の兎や角いふ所のためか殘念ながら奉天に引返すの止むなきに至り候、その後當チチハルに於て馬賊討伐に二度參加せるのみに有之、それも逃げ足の速き彼等は、祿々の應戰もせず逃げ失せ候なれば、一向張合もなく只々武運の拙さを歎き申候、其後十二月十八日より戰利品野砲の操作法を敎育せられ、之も昭和七年初頭に決行の錦州攻擊に參加の見込さかにて、敎育振りも猛烈に御座候、吾等は錦州攻擊の日を待ち喜び勇んで勉强いたし居りしに、遂參加するに至らず今以て殘念至極に禁えざる所に候、尙又一月十四日山砲隊に編入され、只今は戰利品の山砲兵として働き居り候、入營後出征迄は小銃手に有之、出征後輕機關銃手になり、戰利品野砲の敎育を受け、また山砲隊に編入せられたる次第にて自分としては好ましからざる變化に候も命令なれば致方なく、滿足して精勵致し

居り候、一時一段落をつけたるやの戰局も再び起り、二月一日にはハルビンに出動命令を受け、此度こそはと準備を整へ、將に出發せんとする際、案外の邪魔物現はれまた支那軍の鉄道破壞等の爲め、また〳〵出動見合せとなり、折角の準備も空しく荷造の解体も癪に障りその儘放り置き候、本日の情報にては馬占山も遂ひ歸順せしとかに候へば、誠に欣快に候も一面無念さ――張合なさを御推察下され度、一日千秋の思にて好機を待ち居り候。

寒さは皆樣の御案じ下さる程には無之、殊に本年は例年に比し、格別の暖氣なる由にて案外樂に凌ぎ居り候、尙同村出身の諸君とは時々會ひ、故鄉を談じ元氣なるを互に喜び合ひ居り候、但し獨立守備隊の熊谷君とは文通のみにて未だ會ひ申さず候、無線電信隊の赤澤君とは小生の中隊當地飛行場警備中にて、同じ鍋の飯を食ひ居り候、その內に小生は戰利野砲教育の爲め北大營に移り申すべく、從つて今後は面會の機會もなき事と存ぜられ候、本日旅團の電信隊に公用にて參り候處幸にも面會し種々物語りして別れ申候

尙伊勢大神宮御守の寄贈者には厚く御禮申上候

末筆ながら御一同樣益々御自愛の程祈上候、先づは御禮旁々近況御報迄如斯に御座候　敬具

二月九日（昭和七年）

滿洲混成第〇旅團齊々哈爾

歩兵第〇〇〇聯隊山砲隊　木村利一

西磐井郡金澤村長殿

一六、野砲兵大隊の殊勳

謹啓　愈々陽春の氣相象し申候處、貴官益々御清榮の段奉賀候、當隊は出動以來、殆ど全滿を馳せ巡り寧日なく、夕端なる三ヶ月を過し候も、御蔭を以て一同志氣倍々旺盛、撥ち切れる樣な元氣にて勤務罷りあり候間、御安心被下度候、去る一月八日より大隊主力は公主嶺一中隊を以て鄭家屯に駐雷して附近匪賊の討伐中、一月廿八日俄然哈爾賓の同胞救援の命を受け、長谷部旅團に屬して勇躍眞先に出動し、一月三十一日未明、先づ雙城堡に於て精鋭を誇る數倍の敵に對し、奮戰力闘、激戰數時遂に之を潰滅敗走せしめ、東北健兒の意氣を示し、聊か皆樣の御期待に副ひ得たるものと存じ候

豫てより期待し居りたる事には候へ共、今回目のあたり一同の勇敢なる奮闘振りを見て、日露役黑溝台戰と思ひ合せて、之を指揮する光榮をしみ／″＼と感じ、且信頼を新たにし申候、只本戰闘は、砲兵としては全く珍しらしき近接戰闘を以て終始したる關係上、藤井少尉以下多數人馬損傷し、松澤曹長、小玉上等兵戰死する等、幾多貴き犧牲を拂ひたるは誠に痛恨の極にて、その御家族の方々に對しては申譯なき次第にて、當時を偲ぶ毎に新なる涙に誘はれ、衷心哀悼罷りあり申候。然れども之が爲め聊かも氣を落す事なく、却つて一同益々敵愾心に燃え、意氣敵をのんで二月三日雙城堡を出發、前衛たる歩兵第〇〇〇聯隊に屬し、依然トツプを切つて哈市に向ひ前進仕り候、其途中廟黃旗五屯に於て、砲を有する約一千の敵の低抗を受くるや、第一線に進出して歩〇〇〇聯隊と協力、之を擊破仕り候、この戰闘に於て更に兵一名馬一頭の損傷を受けしは返し／″＼も遺憾に存じ候

次で翌四日より五日午前に亙り、哈市南側に陣地を占領せる北滿の雄、丁超李杜等の反吉林軍主力に對する攻撃に於ては、第○師團野砲○聯隊長の指揮の下に之と提携して奮戰し、他に劣らざる活躍をなし得たるものと信じ居り候間御安堵被下度候、特に本戰闘に於ては、晝夜連續盛に敵砲彈を被りしも、人馬共損害なかりしは、天祐と悅び居り候、斯して五日午後哈市に入城し、十一日まで同地兵營に宿營仕り候、この間二月八日哈市に於ける大觀兵式に參加し、翌九日には、第○師團及び哈市居留民主催の慰靈祭に參列して、貴き犧牲者の靈に默禱を捧げ、當時を偲びつつ一同斷腸の思に胸迫りひたすらに其冥福を禱り申し候

出動以來常にあはたゞしき行動に宿命つけられて居る當隊は、今回も其例に漏れず、在哈僅かに一週日にして第○中隊を公主嶺に殘置し、大隊本部と第○中隊は在齊々哈爾の母隊鈴木旅團に復歸を命ぜられ、十二日哈市居留民の感謝に滿つる歡送裡に同地出發、汽車輸送中十四日泰來北方に於て、五六十の匪賊の射撃を受け、兵一名輕傷せしも直に之を擊退して、同日夕齊々哈爾着、久方振りにて親許に歸りたる氣樂さを感じ申し候、當分はこの態勢にありて暫く落付く事かと存せられ申候

先は其後の概況御通知申上度如斯に御座候　敬具

二月十九日（昭和七年）

滿洲派遣野砲兵第○聯隊第○大隊長

陸軍砲兵少佐　小島　好信

岩手縣知事　閣下

一七、戰傷の兄弟の悲觀を戒む

今日は杖をたよりに少し步いて見ました、矢張り痛みを感じます、デモ大部好くなつた樣です、軍醫殿も無理をせぬ樣少し宛步いて見よとの事です、もう一週間もしたら癒る事と思つています、何卒安心して下さい、皆さんには御變りもありませんか、お正月もいゝ所が無くなつて、そろ／＼働く期になりましたネ、今年の麥作はどんなです、此處まで書いたら隊の小野寺軍曹殿と戰友達が見舞に來て下つたので止めていました、その時お前からの便り（二月十五日付）と金澤新町の小岩耕吾君達が、八幡詣りをして下されたお守とを持つて來て吳れました、そして軍曹殿が歸へられると直ぐ第〇中隊の三浦軍曹殿と、やはり以前の戰友達が、見舞に來て吳れ、先刻迄いろ／＼の話をして歸られました、それから夕飯を食ひまた書き始めたのです、目下外科室には十人の患者が、自分には每日何人か宛見舞に來て吳れるので、何んとなく力強い感じがします、それにつけても速く癒つて働きたいものと念じてゐます、お便りによると、余り面白くもない正月だつたとか、然し家內睦まじく皆健康で正月をされたらそれ程樂しい事はないのです、面白くないとは一体どんな事なのです、多分將來の事でも考へてでせうが決して悲觀する事も心配することもありません、自分にも經驗があります、お前の氣持はよく／＼分るのです、只勉强なさい、修養なさい、尙無理する事はいけません、大いに働く事も結構です、若い時です、講演とか其他修養になることは、見たり聞いた、事が必要だと思ひます、但し生意氣はいけません、分つたふりするのは修養の足りぬ爲めです、お前はそうだとは言ふのではありません、否お前に

限つてそんな事はないと信じて居ます、海軍志願は確實ですか、それも良いと思ひます、とにかくに、よく働きよく勉强なさい、無理せぬ様に…………

又便りします、これから小岩君に禮狀を書くつもりです、私の事は心配せずに下さい、尙手紙は三一の山砲隊へ、それから手紙には日付を書いて下さい時々忘れてる樣ですから…………

二月二十二日　（昭和七年）

在滿チチハル衛生班

外科室　木村利一

刈生澤　木村金吉殿

一八、軍艦八雲乘組縣人より

謹啓　時下春暖の候益々御淸榮の段大賀奉り候降て八雲乘組縣人一同御蔭樣を以て無事軍務に罷りある候間乍憚御休神被下度候　陳者日支事變以來北支各地の警備に任じ、或は青島事變に、天津事變に、尙又錦州軍撤退に際しては陸軍と協力、酷寒怒濤と闘へ葫蘆島、山海關、秦皇島と移動警備に全力をあげ當時問題の敵に無言の威壓を與へて之を完全に撤退せしめ得たるは一重に皇軍の威力と愛國心に燃ゆる同胞一同の御後援と激勵によるものと存じ候、玆に生等一同愈々報國の念を固め奮勵努力以て皆々樣の御期待に副ひ奉る意に御座候、別送の寫眞は本年二月十二日葫蘆島在泊警備の折結氷中にある八雲の光景に有之吾々には思出深

きものに御座候、就ては記念の爲め一葉贈呈仕候間御受納被下度候、終に臨み貴下の御健勝を御祈申上候　敬具

昭和七年四月二十七日　於威海衛

第○遣外艦隊八雲乗組岩手縣人一同

石黒英彦殿

一九、在錦州部隊は豫想以上の活躍に候

謹啓　小生出發に際しては多大の御厚情を辱うし難有御禮申上候、御陰樣にて出發以來恙なく、十八日大連着、熱誠なる同胞の歡迎裡に上陸仕候、次いで表忠塔、大連神社等參拜の後、過去卅有余年の昔、同胞數萬赤き血をそゝぎし旅順の戰蹟を訪候、當時を偲び轉た感慨無量のもの有之候、當日午后九時の夜行にて奉天に向ひ翌日早朝奉天着、次いて八時急行にて錦州に向ひ申候、途中警戒を要するとの注意を受け候へしも、何の事なく午后三時錦州に到着致し、只今漸く宿舍に入りたる次第に候、在錦州部隊は豫想外の活動に驚き申候、何卒今後共宜しく御後援を御願上候、先づは安着の御報迄、時節柄御自愛の程切に御祈り上候

昭和七年七月廿一日

任錦州工兵小隊　堀井中尉

岩手縣知事石黑英彦閣下

二〇、祖國に報ずる覺悟を堅め居り候

謹啓　暑中御伺申上候偖て小生渡滿に際しては御多忙中にも不拘遠路態々御見送被下又多大の酒肴料を戴き何とも御禮の申し樣も無之候、海陸恙なく十九日無事錦州到着、表記中隊に編入せられ候に付乍憚御休神被成下度候

この上は一死君國に報すべき覺悟と決心を持ち、屍を曠野に曝らして祖國の爲美しき犧牲となり、縣民各位の御恩に報じたき所存に御座候、先は寸楮呈上御通知申上候　敬具

七月二十五日

滿洲派遣軍第〇師團步兵第〇〇〇聯隊〇隊

菊池敬

岩手縣知事閣下

二一、一先づ義州に落付き申候

謹啓　櫻花爛漫の候

閣下には益々御健勝にて縣政發展の爲に鞅掌の御事と存じ上候、陳者今回當師團滿洲派遣に際しては、御繁忙中、縣出身將兵を激勵の爲態々御來弘御慰問下され御厚志の段奉深謝候、御蔭樣を以て十三日午後二時青森港出帆、以來海陸途上無事、去る二十日午後四時半我が所屬の第○隊分屯守備地たる義州に到着、警備勤務に從事致し居り候間乍他事御休心下され度、尙縣民諸氏にも宜しく御願申上候當地は御承知の如く、山海關殊に熱河方面に對しては戰略上の要点なるのみならず、同方面開發上の要線にて、將來大に發展する處と存せられ候、而して當地方の情況は一般に、日本軍に對し好意を有し且つ平穩に御座候へ共、落付次第奥地匪賊討伐に出動を企圖し居り候、其際は特筆大書すべき何物かを得る事と今より期待致し居り候、氣候は弘前附近と同樣にて雨少く晴天の無風日本晴の朝などは實に氣持よく候、風ある日の黄塵萬丈と飮料水の不良には閉口に御座候、物資は豐富には無之候へども大体日常の需用を充し得る程度に御座候、先つは御禮旁々任地到着の御挨拶申述度如斯に御座候。恐惶謹言

昭和七年四月三十日

滿洲派遣第○師團步兵第○○○聯隊

步兵中尉　阿部眞六

岩手縣知事石黒英彥閣下

追伸　當地分屯の關係上曩に派遣せられある田邊大隊の諸官には拜眉の機を

得ず遺憾に存じ居り候その內機を得て御會ひし閣下の御意圖と御名刺を御届け致すべく候

二二、盛岡工兵隊渡滿（第一報）（五月十一日着信）

謹啓　春陽の候各位益々御淸穆に被渉候段慶賀の至りに奉存候　扨而先般當中隊渡滿に際しては公私共甚大なる御後援と御芳情とを辱ふし且つ出發に際しては御繁忙中にも不拘態々歡送の上御激勵の御言葉を賜り一同感激措く能はず勇躍して出發したる次第にて誠に難有御禮申上候

屯營出發以來十三日青森港出帆十八日大連港上陸、同日同地出發二十日錦州着警備の任に服し居り候處廿三日突然北進の命を受け、一部を錦州に殘置し主力は廿四日錦州出發北進廿六日敦化着、一同元氣旺盛にて目下一名の患者もなく警備の任に服し奮闘致し居り候間御安心被下度願上候

尙當敦化附近は今尙兵匪の跳梁止まず、之がため掃蕩或は討伐を實施せる次第に有之候、氣溫は日中廿一度內外、夜間九度內外に有之候、當地の人口は支那人約八千人日本人約百人朝鮮人約四百人の小都市なるも給養は凡て關東軍倉庫より補充せられ先づ以て順調に實施致し居り候、然れども數日前吉敦線中の一鐵道橋燒却せられ當地唯一の後方連絡線を遮斷せられたる有樣にて目下之れが復舊作業に忙殺せられ居る次第に有之候、又錦州は奉天省唯一の大都市にして人口約三十萬と稱せられ仲々繁華の商業地の樣に見受けられ候、該地の氣溫は日中廿一度內

外夜間十一度內外に有之候、實は早速御禮を可申上の處任地初着以來旣に數度の移動を命ぜられ、加之警備其他の諸勤務に忙殺せられ、遂失禮致し居候間何卒不惡御諒察被下度願上候、先づは將兵一同に代り御禮旁々御報知迄申述度如斯に御座候、尙今後一層奮鬪の上任務の達成に努力し皆樣の御期待に添はん覺悟に御座候、何卒將來共倍舊の御鞭韃と御後援とを重ねて御願申上候

特に銃後の家族の救濟に就ては何分にもよろしく御願申上候、乍末筆皆樣の益々御健勝あらん事を御祈申上候　敬具

昭和七年五月二日

滿洲派遣敦化駐在

工兵第〇大隊第〇中隊長　小泉　於菟彌

岩手縣知事石黑英彥殿

一三、事變終れる上海から

拜啓　早や初夏の候と相成りました、皆々樣には益々御壯健にて御消光の事と遠察致します。

扨て此の度の事變に際しては、一方ならぬ御心勞を煩し御蔭樣を以て、幾多の激戰にも無事最後迄奮鬪致す事の出來ましたのは一重に皆樣方の御後援の賜と厚く御禮申上げます、旣に皆々樣も御承知の通り、事變も一段落して今や平和の曙光も見え初め、彼の事變中は支那人の影一つ認めざるに、昨今は從前の通りの賑ひを呈して居ります、今まで吾が陸軍の姿など認めた事のなき上海市中に、大部隊なる吾が陸軍の往來するなどは、國際都市上海の風情を一入添へて居ります。

停戰會議も首尾よく成立調印され、近日中に陸軍は全部內地へ歸還する事なれば、今後は再び我等陸戰隊は陸軍の分まで任務が加重する事となり、尙一層緊張努力して警備の任を完ふすべきと存じます、又我が海軍陸戰隊も數回に亘り、母國へ凱旋致しました部隊も御座います、小兵も五月中旬頃當地發凱旋の豫定とお知らせ申しましたが、色々お上のお都合に依り殘留する事と確定し、そして陸戰隊は新たに編成されるに付、左記部隊へ編入致しました故御承知相成り度く、此の頃は每朝の如く、戰友戰死の地に詣でては、當時の樣をそぞろに追想し、異鄕の地に護國の神となりし友の生前の事とも一入偲ばれ熱き涙に咽ばれます、この間墓標に參拜せんとして急ぐ時、何處からとなく愛らしき幼兒を負へる日本婦人現れ、手には水桶と箒と花束を持ち、やがて路傍に立てられし戰友戰死者の前に到り心こめて掃き淸め、水を注いで花を供へ、いと懇ろに禮拜して立ち去り行くを眺めた時、感慨無量の思に打たれ軍歌の一節に「勇士は此處に眠れるか」の一句など、しみ〴〵胸に迫るを覺えました。

追々氣候も暑さに向ひつゝある折柄、皆々樣の御健康を祈ります、先は御禮旁々あら〳〵近況お知せまで　敬具

昭和七年五月三十一日

陸戰隊本部工作隊

菊池忠三

縣知事石黑英彥殿

二四、盛岡工兵隊の轉戰（第二報）

拜復　新綠滴るの候益々御清穆に被渉候段奉賀候、扨先日は態々御鄭重なる御慰問の御芳墨を賜り誠に難有厚く御禮申上候

降て爾來當中隊一同、皆々樣の御後援により益々志氣旺盛に、兵匪の討伐に或は友軍の漕渡、又は架橋作業等に忙殺せられつつ、昨二日敦化北方約二十里の南部干溝子に到着、同地に露營致し居り候、尙昨二日午後一時頃、王德林の部下約三百、同高地を占領しあるに遭遇し、同行の步兵〇中隊と共に攻擊、激戰約二時間の後擊退。同三時頃敵の陣地に肉迫奪取、目下警備中に有之候、數日前より日本軍北進せば一戰を交へんと豪語し居れる敵も、遂我軍の攻擊に支へ切れず、數線の陣地と連長一の死體を遺棄し、相當の損害を被りたるものゝ如く北方に退却致し候

將兵一同益々勇躍任務の達成に奮鬪致し居り候間何卒御安心被下度候、先づは御禮旁々近況御報知まで申述度如斯御座候

乍末筆閣下を始め各位の益々御健勝あらん事を御祈申上候　　敬白

昭和七年六月三日

工兵第〇大隊第〇中隊長

工兵大尉　小　泉　於蒐彌

岩手縣知事閣下

「註」　わが工兵隊は、この頃滿洲派遣軍敦化支隊に屬して居つた。

二五、私は盛岡生れの者必ずや御期待に副はん

拜復　小官儀皆様には未だ拜眉の榮を得ず候も盛岡生れの者、目下幸に職を歩〇〇の中隊長に奉じ錦州城内の警備を擔任致しある者に御座候、本日は全岩手の皆様よりの御慰問の金子を頂戴致し感激この事に御座候、お陰で元氣で必ずや御期待に副ふ可く奮闘の覺悟に御座候へば何卒全縣の皆様にもよろしく御傳へ下され度候先は右御禮申上候　敬具

（昭和七年六月十八日發信）　工藤俊二

岩手縣廳内滿洲派遣兵慰問係御中

二六、興城から

（昭和七年七月十八日受信）

先日は慰問金御惠與下さいまして有がたう存じます、別段の功績もない私が、斯る御親切を戴くといふ事は甚だ恐縮に堪へませぬ、早速御禮申上ぐべき筈でありましたが、先般我が興城守備隊は約八百の義勇軍の爲めに夜襲を受け、激戰時餘に亘り之を擊退し、次いで四里餘追擊を行ひまして徹底的に打擊を與へたのであります、敵は更に新鋭を加へ再擧を計りつゝあるといふので、日夜警戒に忙殺されて居ります、このやうな狀態なので遂ひ失禮して居りました、

私は昨年十一月、混成第〇旅團の一員として出動以來、各地に轉戰致しましたその間に死線を越えた事も一・二度ありましたにも拘らず、今日迄元氣に活動し

得た事は、一に皆樣の熱誠なる御同情と御後援によるものと深く感激して居ります

滿洲にはまだ匪賊や義勇軍、或は救國軍などいふものが盛に活動して居りまして、我々軍職に身を奉ずる者の、努力を要するものが多く殘されて居ります、今後共皆樣の御後援によりまして、更に〳〵よりよく活動を續行したいと思つて居ります、當地の昨今は燒きつく暑さで、日中は百十度に昇ります、コレラ、赤痢も流行して居ります、而しながら兵馬共に益々志氣を鼓舞し皇軍の任務に邁進して居ります、先づは御禮かたがた近況まで

元混成第〇旅團　歩兵中尉　今野慶治

岩手縣知事閣下

二七、盛岡工兵隊（第三報）

暑中御伺申上候

時下炎暑之候各位益々御健勝に渉らせられ候段奉賀候降而當中隊一同四月下旬以來、敦化　寧古塔（寧安）道約六十有余里の築設改修中の處去る七月十三日目的地寧安に到着仕り候、實に敦化出發以來八十有余日、この間兵匪の妨害と大自然の難關とを征服し、露營に次ぐに露營を以てし、一意北進を續行したるものに有之、牡丹江上流より風光明眉の鏡泊湖東岸を經て肥沃の地東京城に至る迄は全々前後に連絡の術なく、自然の無音に打ち過ぎ申候、尙寧安は、露、鮮國境に近き牡丹江流域の一小邑にて、皇軍入城以來秩序全く恢復し、市況活氣を呈し居

り候、
近く原師團錦洲へ復皈のこと、存じ候も、東支東部線の運行容易ならず、兵匪の跳梁は全滿に亘つて今尚止まず、東洋永遠の平和の爲め、層一層、堅忍持久の精神を以て精勵を要する次第に有之候

出動以來絶えざる各位の熱烈なる御聲援により、將兵一同壯健にて任務に邁進し、東北健兒の眞價を發揚致し居り候につき御休心被下度候

尙將來共倍舊の御後援と御鞭撻とを賜り度御願申上候、先づは右不取敢暑中御見舞旁々近況御通知申上候　敬具

昭和七年七月二十日

滿洲派遣軍工兵第〇大隊第〇中隊長小泉於菟彌外將兵同一

岩手縣知事閣下

（八月八日受信）

二八、ラヂオセットの御寄贈感謝惜く能はず候

謹啓　秋冷の候知事閣下には彌々御淸穆の段奉賀候、扨て今回當聯隊の爲めに慰問品としてラジオ四個御寄贈に相成り本日到着仕り候、御厚情の程誠に難有奉存候、御蔭を以て多大の娯樂慰安を得、各地のニュースを聞き、一同大に喜ぶと共に感謝惜く能はざる處に有之候、滿蒙目下の狀態は、今や滿洲國も正式に承認せられ、平和の曙光を認むるに至りしも、尙前途に多難を思はしむるもの有之候就ては我等一同益々其責務の重大なるを自覺し、今後一層奮勵努力、皇軍の武威を發揚する覺悟に有之候へば何卒今後共倍舊の御後援を賜はらん事を偏に御願申上候

時下不順の候、邦家の爲切に御自重御自愛を御祈り申上候、先は右御厚禮申述度如斯御座候、　謹言

昭和七年九月二十六日　　歩兵第〇〇〇聯隊長　早　川　止

岩手縣知事石黒英彦閣下

二九、我々は何人も信頼せぬ唯第二國民の兒童を信頼するのみ

謹啓

時下寒冷の砌り皆様には御變りは御座いませんか御伺ひ申し上げます、降つて我々一同至極健康にて一意軍務に服勵致して居りますから他事乍ら御安心下さい。

扨我々は表記の如く歩兵第三十一聯隊の某小隊の一分隊で御座います。

此度は御麗はしき縣民御一同の御思召とあつて多大なる酒肴料を頂きまして眞に有り難う御座いました、厚く御禮を申し上げます。

私は分隊を代表して不束かな書面を認めますが、亂筆亂文且つ失禮の所を御見逃がし下さい、では申し上げます。

甚だ以つて無禮には存じますが我々の出生地我岩手縣の各方面に於て不況であると云ふ事は昨年以來新聞或は幾多知人の報導する所に依り我々の心に刻まれて居ります、然るに今回我々の爲めに多大なる酒肴料を出されました、之は勿論我々をして各方面から慰安せしめ樣と云ふ有り難き又貴き御純情の顯れであると云ふ事は身に徹して居りますが、事變とは申せ渡滿して居る我々は旣に戰地同樣なる有り難き御上の御待遇を受けて居ります、給料も多く六割の增與、食糧も每日立派なもので、暖かい御飯を澤山、蓄音器も有れば、ラジオも有り、暇々には外出も出來、寒暑に伴ふ衣類は申分なき迄に完全にして貰ひ、又慰問袋や手紙或は恤兵品等、萬事に於て物質と云はず精神的とを問はず、又一方內地の家庭に對する別待遇と云はず、何から何迄我々をして、後顧の憂ひなく、やつて貰つて居るもので御座います。一方飜つて鄕里を思つて見ますが、縣內の狀況は如何にと……。

我々は聞く、東北の飢饉、否我岩手の饉飢と、元來豊富でない我縣に饉飢と云ふ恐ろしい對象物、之を聞いた許りで早や氣遣はれる所です、何處の小學校の貧民兒童は御辨當に困る、或は三度の御飯を一度にする、其れも御飯でなく御粥にしてやつと糊口を凌ぐとか、又或は貧家の話、滿洲の可愛い子から幾十日の久し振で手紙が一本來たが、生憎幾らかの未納金があつたと云ふ、たしか三錢か四錢のものであつたでせう、其れを充すだけのお金が無かつたので、附近の家を極力物色して見たが見つからす、金がないから之を返して下さいと配達に悲痛な狀況を訴へた老爺のある事を聞く、其の老爺の心中や如何ばかりで御座いませう、聞いた許りで淚が溢れます、又小學兒童の履き物がなく、素足の儘通學して居る者もあると、第二の國民、帝國を背負つて立つべき第二の國民、可憐な其れ等兒童に對し誰か一掬の淚なきに置かれませう、我々は第二の國民其ら貧民兒童、貧民級に對

する同情の念に堪へんのであります、此の度の酒肴料にも此等貧民の方々から集つた一錢二錢も含まれて居る事と信じます。兵の一人々々が私に對して曰くです（最も嚴肅に）「班長殿、私は今度縣から來た酒肴料が何となく涙に化してなりません、貴下も御承知でせう、我が岩手縣の内狀は困つて居るのです、私が出征する折、石黑知事閣下が聯隊に慰問に參りました、御土產と云つて豆銀糖と昆布と、酒を持つて來ました、其して次の樣な事を云ひました、「我縣は元來物資に乏しい旣に救濟を持つ程に貧しい、然し斯る貧しい中から何故此の樣なものを持つて來たかと申すと酒は岩手の水と米で造つたもの、豆銀糖は岩手の產大豆で製したもの、昆布は海岸で採れる、所謂縣民直接に造つたもの即ち縣民の心を込めたものである、不足なものではあるが此の樣なる意義あるもの故何卒嚙みしめて其して縣民の眞心を解して貰ひ度い無言の激勵である、帝國の爲に働いて居る貧なれど自給自足で居る鄕里を思はないで一意帝國の爲めに働いて貰ひ度い」と云ふ知事閣下の徹底したる御言葉でありました、岩手縣民の自製、自給自足と云ふ言葉が何とも云へない程感に打たれました、私は元來酒は飲めなかつたが此の時初みてコップで三つも飲みました、未だに其の心持が殘つて居ります、今日あの酒肴料は戰時給與の我々に一文だつて必要ありませうか、其の金は貧民兒童にでも施したなら何んなに喜ぶでせう。何とか班長殿之に對する我々の考を陳べる方法はないもんでせうか」。と、又一人曰くです「我縣の貧民兒童の行狀あり乍らあのお金は何ですか、第二の國民たるべき兒童、我々は何人も信賴しない、第二の國民兒童を信賴するのみであります、其の可憐な兒童は慘めなものと聞いて居ります。彼等に對する何か方法はないでせうか」。と、又一人曰く「班長殿私にも意見があります私は何も言ひません只あの金を憐な子供等にやりた度いです」

又一人「班長殿一層の事當分隊だけ集めて縣に返して、少し考へて呉れと差出さうではありませんか」といふ强硬説もありました、兼ねて思ふて居つた矢先、部下の此の有樣、私は飛び上る程嬉しかつたのです其して云ました、「解つた、お前達の心情は解つた、お前達の樣な兵があればこそ、我帝國の軍隊が强い、否、聯隊が强いのだ、天晴熱血男兒、持つものは良い兵である、お前達の樣な立派な兵を持つ自分は世界一の幸福者である、其れ程思つて呉れるか、鄕里を思ふ事が帝國を思ふ赤誠だ、良し／＼其の氣分を永久に忘れてはならない、我々の心が兒童に解り、縣民に解られたら定めし喜ぶだらう、又憤起するだらう、そして內と外で帝國の萬歲が叫ばれる、そして我々は今後共に勇敢に／＼祖國の爲、陛下の爲め、東洋の爲に働かう」と、云つたのです、斯る熱意から期せずして集まつたお金は、僅少ではありますが同封のお金なんです、我々は貧民兒童への慰めといふ外に何物もありません、何卒救濟の一端に致して下さい、決して、心配のないもので御座いますから惡しからず何なりと其筋に御使ひを願ます。念の爲に附け加へますが當分隊は分隊長以下恥かしいお話ですが、畑、地、田もない山もない本當に畑地二反歩とない家庭を有する者許り揃ひも揃つた貧乏兵士等で御座います。「良く揃つたもんだなあ、あは、、、」と快活に笑つて居ります、又此等は國を思ひ鄕里を思ふ赤誠から不知不識熱い涙と化し、軍隊には無い例ですが打ち揃つて握手を換はしたのであります、何卒兒童へ宜しく…………

銃後の皆樣で憂ふる事は御座いません、子たる我々渡滿兵士は何も貴下達から物質的に慰問が無いから毎日の勤務を…討伐を　戰鬪を……　敎育其他が鈍りません先にも云つた如く御上の御思召で澤山です、貴下達が我等縣の子供を思ふ如く、我々は又兒童を思ひ縣を思つて居ります、之が取もなほさず祖國大日本帝國を思

ふの念に外ならず、愛國心に燃えて居ります。

愛國の勇士と豪語致しませう。

愛國心の强い軍隊は强いのです。

我々は皆此の意氣です、强いのです、戰も上手なのです正義でもあります、世界を相手に取つて、猶負けないのです、聯盟……リツトン報告……何が恐れませう、まして無智な土匪賊僞勇賊何かあらん、死んでも彼等には勝を讓りません意義ある我帝國の主張、帝國の爲め、東洋の爲、民族の爲め、目玉の黑い內、飽く迄も戰ひます、以て皆樣の御期待に沿ひ奉らん事を誓ひます、ちつとも御心配は入りません何卒々々御安心下さい。

亂文亂筆而も無禮を省みず右我々の心と將來の決心とを述べ度く斯の如くに存じます。

終りに皆樣の御健康と萬歲を御祈り致します。　早々不一

十二月二十四日（昭和七年）

某分隊長以下七名

岩手縣學務課長殿

貧民兒童及御家庭一同殿

連名

某軍曹　五圓

某上等兵　壹圓貳拾錢

某三年兵　壹圓

同　同

同　同

同　　同

某二年兵　　八拾錢

計　拾壹圓也

右貧民兒童救濟の一助に御願ひ致します。

三〇、軍艦北上の縣人兵より

謹啓　時下初冬の候縣知事閣下には益々御健勝に渉らせられ縣政並に國事に御精勵の事と存じ奉り候降て私達一同御蔭様にて無事軍務に勉勵罷在候間乍他事

御休神下され度候

扨て回顧すれば昨年十二月滿蒙事件に關聯し、時局騒然たる時母港を出港し、南支警備に任せし以來、幾多の事變に遭遇せしも、閣下初め皆様の御庇護に依り重大任務も無事結了。十二月廿一日他艦と交代恙なく母港に歸着仕候、警備中は多大なる御後援と御慰問に接し一同深く感謝仕候。

時相は尚多事多難にして、寸刻も偸安を許さざるの秋なれば、一同は益々士氣旺盛、一旦有事の際は閣下の御期待に背かざる覺悟に御座候、先は書中を以て御禮旁々安着の御通知申上候　敬具

昭和七年十二月廿五日

軍艦北上乗組　岩手縣人一同

岩手縣知事石黒英彦殿

三一、他縣兵の羨望となり居候

謹啓

時下嚴寒の砌閣下並各位に於せられては愈々御勇健之趣奉賀候降而私共出征以來益々壯健にて軍務に奮勵致居候間御安心被下度候、陳者今回私共出征縣人に態々御慰問金を御惠贈下され誠に感激の至りに耐へず厚く御禮申上候、實は目下不況の時代に直面し居る事とて當然御辭退申上ぐべき筈の處、御芳情を拜察する時却つて失禮と存じ謹みて頂戴仕候、尙申添への度は度々の御後援の次第を師團會報にて達せらるる時、他縣人の羨望の的と相成居り又私共岩手縣人の誇りとも感じ居る次第に御座候、次に此の機會に於て申上げ度ことは、滿洲國上に明かに示し

ありながら、威令更に行はれ居らざる地域は熱河省にて、我等は斷じて紙上の版圖として放置し置く能はざるものと確信致居候何れ此の解決に方りては東北男兒の面目を發揮し充分御期待に副ふ覺悟に御座候。

先づは右厚く御禮申上ぐると共に蕪辭を弄したる段御海容下され度候、乍末筆益々閣下並各位の御健祥を祈り上奉り候　敬具

十二月二十六日

歩兵第〇〇〇聯隊

中隊長　河野孝次

一等靴工長　水野直三郎

一等蹄鉄工長　根田友毅

石黒英彦閣下

三二、御高恩の萬一に報ん覺悟に候

拜啓

益々御清榮之段奉賀候、降而今度は岩手縣出身將兵に對し過分の酒肴料を御惠送下され誠に有難く拜受夫々分配致候處一同感激措く能はざるもの有之候。

今後一層奮闘の上大任を完ふし以て御高恩の萬分の一に報ひん覺悟に御座候、何卒將來一層の御聲援と御鞭韃の程御願申上候。

先づは一同に代り御禮申述度如斯御座候　敬　具

十二月三十日

滿洲派遣軍工兵第〇大隊

岩手縣知事石黒英彦閣下

中隊長　小泉　於莞爾

銃後の援護

三三、家族へ迄の御援護は全く豫想せざる所

謹啓　貴社倍々御隆昌の段奉賀上候、陳者過般愚弟三郎儀滿洲派遣軍に從軍致し居候故を以て、手前共家族へ迄慰問金御惠投の御配慮にあづかり、過日岩手縣廳を經由正に頂戴いたし候、元來愚弟儀は軍人として御奉公致し居り候者に有之派遣軍に參加するを得候事のみにても、此上なき仕合せと本人並に手前共も存じ居候處、斯る御慰問を頂戴いたし候は、誠に恐縮の至りに候、偏に御社等の御配慮の然らしめる所と有難御禮申上候、本人へも報導いたし獻身御奉公可致樣申傳ひ候處、かく家族へ迄御援護は豫想せざる所と感激いたし參り候、先は御禮申上度如斯に御座候　敬　具

昭和七年一月十三日

東磐井郡　畠　山　　始

岩手日報社御中

三四、銃後の御援護唯々感泣あるのみ

謹啓　御社益々御隆盛の段慶賀の至りに存じます、さて此度村役場よりの通知にて承りましたが、多大なる御慰問金を賜り難有御禮申上ます、祖國の爲め微力を捧げてゐる我等に、斯の絶大なる御配慮下され唯々感泣の外ありません、この御同情、御期待に背かぬ爲には今後益々奮勵努力、以て銃執るものの本分を完ふせんものと堅く覺悟をいたします

先は粗筆を以て取急ぎ御禮迄　　敬　具

昭和七年一月十五日

南滿洲開原守備隊　高　橋　　昭次郎

岩手日報社御中

「註」この時の遺家族慰問は縣及岩手日報社・岩手毎日新聞社・愛國婦人會岩手支部聯合會で行つた、それ〳〵の關係者へ禮状が　家族代表者及び出征兵士から届いてゐる

三五、戰傷者見舞

謹啓　春陽の候貴官益々御清榮の段奉賀候、陳者今般小生の負傷に際し格別の御同情を賜り、遠路態々社會課長殿を御派遣被下、御懇篤なる御見舞の御詞を頂戴仕り感激に不堪候、御高庇を以て其後の輕過は良好至極に有之候間乍憚御放念被下度候

右謹んで御禮申上候　頓首

昭和七年三月廿六日

横須賀海軍病院內　伊藤文雄

岩手縣知事閣下

「註」此外內地の陸海軍病院收容の戰傷者に社會課長を特派してゐる

三六、お蔭にて年を取り申候

拜啓　時下寒冷の候益々御清榮の段奉賀候　陳者愚息正一滿洲派遣軍に加はるや、皆樣の御懇篤なる御厚情を受け、其の上今回は御鄭重に家族慰問金御惠送下され難有御禮申上候、御蔭樣を以て無事消光罷有り候段全く御厚誼に依り候事深く感謝に不堪候　右不敢取謹しみて御禮申上候　敬具

一月二十九日(昭和七年)

家族　小　澤　勘三郎

岩手縣廳御中

「註」舊年末に當りて慰問金贈呈に對しての禮狀である この外端書又は封書のもの三十八通ありなかに「御蔭樣にて年を取り申し候」又は「實は釜石鑛山働きに家内一同參るべき決心いたし候處幸ひ慰問金を頂きましたので釜石へは止め派遣兵の歸る迄待居り申すべく候」或は「滿洲派遣軍に加はりたるの故を以て、此度家族慰問として多大の金員御惠與を蒙り、正に拜受、御蔭を以て目下貧困極りなき拙者の家政、年末の苦境を御救濟下され、御恩誼の程家族一同深く〱奉感泣銘謝候。早速在滿の悴にも申傳へ申すべく、定めし一段と後顧の憂を一掃し、安心して軍務に盡忠罷在る事と信じ申候」など衷心から感謝の意を表したものばかりである。

三七、家族に對し國家的特典なきに特に御便宜を賜り感激無量に候

復啓　初夏の候に候處益々御清適の段奉慶賀候、陳者子息正郎事、去四月廿六日佐世保より野島便乘にて三十日横須賀海軍病院外科病舍に轉院致したる次第に御座候へば、此際私共見舞に出張致度に付、御慰問御光來の際の御話も有之候へば早速御伺ひ致し御繁忙中種々御手數を煩はし誠に御申譯無之候、扨て國家の施設何等特典なきにも係らず此の際特に御便宜を賜り旅費の補給として多大なる御資金御送附に預り洵に感激無量、只々感謝に堪えざる所に御座候、先は受領書相添御禮の御挨拶申上度如斯御座候早々　拜具

昭和七年五月十九日

和賀郡中内村　佐々木　深　吉

今井社會課長殿

報　告

私共は二人にて十四日午後四時半の上り列車にて、十五日午前七時半頃横須賀に到着、正郎入院の海軍病院に至れるは午前十時頃に候、正郎事は佐世保にて會ひたる時と異り、益々元氣にて、今にては室内は杖によらざるも數間位歩行出來る程度に回復致し居候、軍醫官殿にも經過宜敷に付き、必ず完全に回復すると話し居らるる由にて、七月中に全治すれば元の加賀に乘り組みに致さるるとの事にて本人も非常に悅び居り候、然るに傷口は未だ治らず、少くはなほりたるも膿は出來居る由、又彈片の殘留もある爲め十七日第三回の手術をなす由に御座候優秀なる設備にての事とて遠からず全快に至るべく存候へば御安心下され度候、私共は田浦町の下宿に二泊し、三笠及軍港内航空隊及び軍艦を觀覽致し、十七日午前九時頃出發、東京にて日中ブラツキ午後七時の下り列車にて十八日無事歸宅仕候

右亂筆にて御報告まで

次に彰表狀寫を附記致候

表　彰　狀

小谷大尉及生田大尉ノ適切勇敢ナル、敵戰闘機撃墜ハ帝國海軍航空史上ニ一新紀元ヲ劃セリ、其功績ヲ表彰ス

昭和七年二月二十二日

上海旗艦出雲　第〇艦隊司令長官　野　村　吉三郎

【註】　和賀郡中内村出身、海軍一等航空兵佐々木正郎は、昭和七年二月廿二日上海蘇州上

空の戰鬪に參加（小谷大尉機崎長中尉繰縱）小谷大尉は空中にて戰死、佐々木航空兵は重傷（右下腿貫通銃創）し、二月廿六日佐世保海軍病院に收容せらる。當時直ちに見舞狀と共に慰問金（縣より五圓及岩手日報社・岩手每日新聞社より拾圓）を家族に贈りたるに、父淺吉は佐世保に赴き親しく見舞をしたり。次で五月初旬橫須賀海軍病院に轉入するに及び父母兩名にて見舞に趣かんとするに際し特に旅費補給として、縣より貳拾圓を家族に贈りてその行を應援したり

三八、家族への慰籍本當に勿体なき所

謹啓　向寒の折柄知事閣下には益々御多祥に渡らせらるゝ御樣子、遙か滿洲の地より御喜び申し上ます、陳者私事昨年十二月一日當地守備隊に入營致した者ですが、鄉里實父よりの通信に依れば私の不在のため知事閣下より、澤山の慰問金を……然も每月御惠み下さるとの由、御厚志の程衷心感謝する次第であります、と共に誠に申譯ない事と存じて居ります、實父も本當に勿体なき事だと申して參りました、玆に更めて厚く御禮申し上ます、私も入營以來至極元氣で任務に邁進してゐます、去る六月中旬から十月中旬まで、約四ヶ月間、裝甲列車の乘組を命せられ、鄭家屯或は通遼附近を警備して居ましたが、恰も七月中旬數回に亘

る敵匪の襲來に遭遇いたしました、私も裝甲車の一員としての任務を完ふ致しました、此の頃は駐屯地新京に歸り、驛直接警備の分遣隊に編入され日々勤務を續けて居ります、何卒御安心下さい

右御禮かたがた近況迄御報申し上ます、末筆ながら閣下の御健康と御幸福とを御祈り申上ます　早々

十一月十四日（昭和七年）

獨立守備隊歩兵第〇大隊第〇中隊
歩兵一等兵　皆川弘三
東磐井郡藤澤町出身

知事閣下

三九、創は淺し、幸に御安慮被下度

謹啓　日增寒さ相加はり申候處閣下益々御健勝に渉らせられ候段奉大賀候、偖て愚息辰三事滿洲派遣軍歩兵第〇聯隊第御〇隊の一員として、去る十一月二十日奉天北方各得窩堡の戰鬪に參加せしめらるゝの光榮に浴することを得候へしも、不幸にして左頸部貫通銃創を受け、再び立つ能はざるに至り、遂に入院加療を受くるの已むなきに至り候事、所屬隊より通知有之、新聞紙上にて報導せらるるや閣下を初め各方面より御見舞を辱ふし恐縮に不堪少からず感激致居候、過般閣下には目下作業中の道路橋梁等を御視察の爲め、我僻村へ御出張被遊候節には、恭なくも戰傷者辰藏の家族に可然傳達せよとの御言葉を賜りたる事をも聞及候、加

之此度は慰問金として多額の金員御恵贈を辱ふし、重々の御厚情海山恭なく御禮の辭をも不知次第に御座候、拙筆にて却つて失禮に有之候へども、御禮申上度如斯に御座候。

負傷後の本人其後は、隊の御都合と御恩典にて、十二月一日附曹長に進級せしめられ、留守隊附を命せられて、入院のまま逐次後送せられ、十二月十七日宇品歸着、目下東京第一衛戍病院に有之、不日原衛戍地に歸着することと存じ候、歸着後は一層御高配を仰ぐ事と存候間何卒倍舊の御鞭韃御敎導を賜り度、拙文失禮をも不顧御禮旁々御願申上候　敬　具

昭和七年十二月二十九日

二戸郡御返地村安比

戰傷兵長三父　田口　佐次郎

岩手縣知事石黒英彦閣下

四〇、救護、慰問概況

〇軍事救護概數

	昭和六年度	昭和七年度
戸數	四〇四戸	七八三戸
人員	一、五二八名	三、四三七名
金額	二四、五九七圓	六二、五六四圓

○派遣兵慰問並遺家族慰問概況

一、戰死傷者弔慰　一、六四五圓

內譯

弔慰金　八〇〇圓　十六名分

花輪贈呈　三二〇圓　十六名分

見舞金　五二五圓　卅五名分

二、戰線將兵慰問　四、四八五圓

內譯

歲末酒肴料　一、三〇〇圓

上海出動海軍へ　六八〇圓

滿洲部隊へ　二、五〇五圓

官幣大社石清水八幡宮守札　五〇圓

慰問品ラヂオ　二八〇圓

三、家族慰問　一一、七六九圓

生計困難家族慰問　九、九六〇圓　六三〇世帶分

出動標識寄贈　六〇九圓

出動記念品贈呈　一、二〇〇圓

四、慰問金品募集並寄贈狀況

一六、九五三圓　縣下各種團体及ビ個人一般

三、七九五箇　千本針縫チョッキ、御守、胴卷、眞綿、靴下、手拭、褌、其他日用品

三〇、二三九通　慰問文、中、小學校、青年團其他

郷土教材叢書の編纂發行に就いて

劃一教育必ずしも無價値でなく、地方的教材必ずしも萬善のものではない。夫々の長所を採つて調整案配する所に教育の妙諦が存する。

從來稍々もすれば、この一方に偏せんとする嫌があつた。教材の地方化にも、郷土教育にも、確實で、しかも精選された資料を基礎とせねばならぬ事は勿論である。この意味に於て、本縣内のあらゆる教育的資料を選輯して、實際家に提供し參考に資すは、極めて必要で有意義と思惟し、玆に本叢書の編纂發行を決意した次第である。

一時に全部を爲し難いから、夫々の專門家を煩はして一題材宛を小冊子として逐次發刊するものである。

編纂委員は何れも本務の側ら執筆せらるゝのであるから、營利事業者のやうに確然たる豫告を爲し難いが、脱稿の順を追ふて續刊する。

本叢書の教材化については、一に實際家の研鑽に俟つもので、教育的價値の厚薄は研鑽の度合に正比例するのであらう。

昭和八年二月　岩手縣教育會

郷土教材叢書　發行豫定目次

第一編　時局教材資料

第二輯　昭和八年七月

第三輯　昭和八年十二月

第二編　郷土研究記要　昭和八年六月　一〇〇

第三編以下豫定

岩手縣の產馬、岩手牛、岩手の羊、岩手米等約三十編開拓時代の岩手縣、中尊寺

大槻氏等約廿五編

昭和八年三月十二日印刷
昭和八年三月十五日發行　（非賣品）

編輯者兼發行者　社團法人　岩手縣教育會
岩手縣盛岡市久保田第二地割外加賀野小路七八
右代表者　鈴木重男

印刷者　大澤權太郎
盛岡市下厨川狐森一番地

印刷所　盛岡少年刑務所
盛岡市下厨川狐森一番地

發行所　岩手縣教育會
盛岡市內丸一地割一番地
岩手縣廳教育課內
振替口座東京二〇五九二番
電話二一一番

終